遊びにおける幼児の“振り向き”的意味

香曾我部 琢

本研究では、まず、遊びにおいて表れる幼児の“振り向き”という行為に着目し、その“振り向き”的実態を明らかにする。次に、事例をもとに“振り向き”から相互作用へと展開する過程について明らかにすることで、遊びにおける幼児の“振り向き”的意味について分析と論証を行う。その結果、“振り向き”が主に4つの要因によって引き起こされ、3歳児が一人で行う砂遊びにおいて“振り向き”がよく表れるものを明らかにした。そして、3歳児の砂遊びの事例から、“振り向き”直後の注視、双方向的な“振り向き”によって幼児同士にその後の相互作用に対する暗黙的な承認が行われることを明らかにした。さらに、その後、幼児は接近することで場を共有し、暗黙的方略で交渉したり、模倣的方略を用いたりすることで相互作用へと至る過程を明らかにした。そして、遊びで表れる幼児の“振り向き”は、その空間にいる幼児や保育者と共に遊びたいという能動的な心理的欲求によって表象されていることを示し、保育者が幼児の“振り向き”を理解することは、その幼児の理解だけでなく、その場においてどの程度の仲間意識、イメージの共有が幼児間に保たれているのか確認する一つの目安になることを示唆した。

キーワード：‘振り向き’、相互作用、3歳児、砂遊び、場の共有

The Meaning of Children’s “Head Turn” in Play: A Case Study of 3−Years−Old Children who Progress from “Head Turn” to Interaction in Sand Play

Taku Kousokabe

The purpose of this study is to clarify that a 3−years−old child’s head turns during play and that there is a process in which this “Head Turn” leads to interaction with peers. An analysis of the meaning of children’s “Head Turn” in play is also included showing that 1) there are four factors for “Head Turn”, and 2) the highest frequency of “Head Turn” is when the 3−years−old child engages in solitary sand play. During play there is a mutual head turn which initiates non−verbal approval of interaction, then progresses to approach, negotiations, and imitation in play and ultimately to elaborate interaction. I suggest that children’s “Head Turn” is a useful measure for teachers to guess the consciousness of children during play.

Key Word：‘Head Turn’, interaction, 3−years−old, play with sand, sharing the space
1. 研究の目的
身体の動きと相関関係
森洋文は、砂場の水遊びに集まった3人の子どもたちが、その水遊びを“飛び越える”という1人の身体の動きをきっかけに、他の2人が飛び始め、遊びが盛り上がった事例を示した。そして、この3人の身体が同じ動きを共有していく姿を、身体の「共振」という言葉を用いて捉え直し、この身体の「共振」によって3人の間に「対人関係的な自己の自己知覚が成立した」ために、この遊びが盛り上がったことを示唆した。塚崎・無藤は、3歳児の“手をつなぐ”、“抱きしめる”といった身体接触の場面に焦点を当て、3歳児が遊んでいるとき互いの身体接触が相関関係の成立と関連性があることを示した。つまり、遊びにおいて現れる子どもの身体の在り方や動きは、物理的な現象として現れるだけでなく、子どもの心情や興味などの内面の志向性をも含んでおり、その場の雰囲気をつくったり、そこでの人間関係に関連づいたりすることで、遊びそのものを支える要素となるのである。

心情の志向性を示す“振り向き”
本研究で焦点を当てた“振り向き”も、これまでの研究領域において重視されてきた身体の動きの一つである。Fernandは、生後4か月の乳児が母親の話しかけ（motherese）を理解し、その声に気づき、選好するときの身体の動きとしてその声の方向に“振り向き（Head Turn）”を行うことを明らかにした。その成果をもとにNelsonらは、乳児が特定の方向に“振り向き”を行い、視覚的な注意を向けている間、同じ方向から流れれる刺激音（Auditory Stimulation）を聴取していることを実験によって証明した。そして、その成果を用いて視覚的に注意している時間の長短を比較することで、乳児の刺激音に対する選好反応を調べるための実験方法「選好振り向き法（The Head-Turn Preference Procedure for Testing Auditory Perception：HPP）」を開発した。つまり、乳児期のはやい段階から子どもが見せる“振り向き”は、ただ単に頭や身体を方向転換させるという物理的な動きとしてだけではなく、その子の興味や関心などと結びついており、その子の心情の志向性を表象した行為と考えられるのである。

この“振り向き”という身体の動きは、厳しい統制下にある実験室では多くの研究者によって研究の対象とされてきた。一方、日常的な場面での“振り向き”はこれまで大きく取り上げられることはなかった。しかし、先述してきたように、保育実践において現れる幼児の身体の在り方や動きが、遊びの中で喚起される友達や保育者との相互作用に何かの影響を与え、その遊びを支える要素の一つとなっていると思われる。そこで、本研究では、幼児の“振り向き”がどのように生み出され、相互作用へどのように影響を与え、展開していくのか、“振り向き”的事例をもとに、その過程を明らかにし、遊びにおける幼児の“振り向き”的意味について分析、論証を行う。

2. 研究の方法
研究方法について検討を行うために事前に観察を実施した（2008年9月25日、30日）。事前観察では、遊びにおける幼児の“振り向き”が突然発的、瞬間的、かつ広範囲に表れた。そのため、“振り向き”が表れることを予測することが難しく、それを生み出した要因はもちろん、その後の相互作用への影響や展開についても理解することが困難であることが判明した。そこで、本研究では、はじめに【研究1】として、幼児がどのような状況や要因によって“振り向き”を多く行うのか、その実態を明らかにしようと思考した。そして、その結果をもとに、“振り向き”が多く見られる状況を選定する。次に、【研究2】では、その選定した状況下において、要因に注意しながら幼児の遊びを観察し、幼児の“振り向き”がどのように生み出され、相互作用へ展開していくのか、その過程を明らかにすること
遊びにおける幼児の“振り向き”の意味

で、“振り向き”の意味について分析、論証を行おうと考えた。

（1）事例収集の手続

【研究1】“振り向き”を3歳児が、どのような場所で、どれくらいの頻度で、どのようなときに行うのか、その実態を調査することを目的とした。そのため、屋外では園庭が見渡せる場所に、屋内では保育室が見渡せる場所にビデオカメラを設置し、定点撮影による事例収集を中心に行った。ビデオカメラでは撮影できない場所をフィールドノートで補足的に記録を行った。

【研究2】幼児の“振り向き”の瞬間とそれ以外の瞬間での様子だけではなく、その前後の観察者と保育者の書き方、相互作用に至るまでの経過を詳細に記述するため、フィールドノートでの記述のみとした。事例を収集する際に感じた不明な点については、主任保育者にインタビューを行い補足した。

（2）対象と期間

場所は愛知県内の公立保育所で実施した。“振り向き”の要因を特定する必要があったため、少人数の保育所で実施した。

【研究1】2008年10月から2009年11月までの期間で、登園からお片付けまでの1時間30分程度、計6回（晴天時屋外4回、雨天時屋内3回）を実施した。3歳児（男5名、女2名）、4歳児（男4名、女2名）、5歳児（男3名、女5名）合計21名を対象とした。

【研究2】2009年5月から7月まで、登園からお片付けの1時間30分程度、計5回実施した。

対象者は3歳児（男5名、女3名）合計8名を対象とした。

（3）分析の手続き

【研究1】で収集した“振り向き”の事例に関しては、事例が頭部や身体の向きを変えることで、これまでの自己の視界外に視線を移すこと、見る対象を変化させる行為を“振り向き”として定義した。しかし、連続して同じ対象に対して振り向いた場合については、何度“振り向き”を行っても1つとカウントした。そして、その“振り向き”ごとに①“振り向き”を行った対象の年齢、②場所、③遊いた種類、④一緒にいた人数、⑤何に振り向いたのか、以上5つの項目によって分類し、比較を行うことで、“振り向き”がどのような状況で多く表れるのか明らかにした。

【研究2】で収集した“振り向き”から相互作用へと至る展開過程の事例については、【研究1】の分析結果をもとに、①“振り向き”直前の幼児の様子、②何に注意を向けたのか、③その後の相互作用の様子、以上3つの場面に分け分析を行った。詳しくは3(2)に記載されている。

3. 結果と考察

（1）“振り向き”の調査結果

“振り向き”の回数

まず、表1では、屋外、屋内の年齢ごとの“振り向き”の回数を示した。合計258回で、屋外で186回、屋内は72回であった。屋外よりも屋内で多かったのは、屋内が物理的に狭い空間で、

<table>
<thead>
<tr>
<th>年齢と場所</th>
<th>屋外</th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>砂場</td>
<td>グラウンド</td>
<td>遊具</td>
<td>ごっこコーナー</td>
<td>製作コーナー</td>
<td>遊戯室</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3歳児</td>
<td>57（37.5）</td>
<td>24（15.8）</td>
<td>31（20.4）</td>
<td>9（5.9）</td>
<td>12（7.9）</td>
<td>19（12.5）</td>
<td>152</td>
</tr>
<tr>
<td>4歳児</td>
<td>24（35.8）</td>
<td>13（19.4）</td>
<td>11（16.4）</td>
<td>10（14.9）</td>
<td>4（6.0）</td>
<td>5（7.5）</td>
<td>67</td>
</tr>
<tr>
<td>5歳児</td>
<td>7（17.9）</td>
<td>15（38.5）</td>
<td>4（10.3）</td>
<td>2（5.1）</td>
<td>6（15.4）</td>
<td>5（12.8）</td>
<td>39</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>186</td>
<td>72</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>258</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

※（）内の数字は各年齢児の合計を母数とした%。

65

(171)
頭部で“振り向き”するまでもなく、顔を上げたり、視線を移動したりするだけで十分であったためと考えられる。屋外の各場所による“振り向き”の回数については、3歳児、4歳児ともに砂場付近での“振り向き”が多く、比率においても3分の1以上が砂場で見られた。これは、砂場では座ったり、しゃがんだりして砂に視線を落とすため頭部を下げる姿勢が多く、近くで声がしたときに、顔を上げ、視線を移したりするだけはその声を出した幼児を確認できない。そのため、頭部や上半身で“振り向き”、視線を移す動作が必要になるという物理的な条件によると考えられる。

次に、表2に示したように“振り向き”的7割以上が1人で遊んでいるときに見られた。これは、同じ遊びを複数人で行う場合、同じ空間や道具を複数人の幼児が共に持つため、必然的に仲間と近づくこと、仲間との言葉や行為のやり取りなどの直接的な相互作用が増え、周囲への意識が薄まること、以上2つの理由によって複数人の遊びでは“振り向き”が減少したと考えられる。

表2 年齢と人数

<table>
<thead>
<tr>
<th>年齢</th>
<th>人数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>3歳児</td>
<td>107 (70.4)</td>
</tr>
<tr>
<td>4歳児</td>
<td>52 (77.6)</td>
</tr>
<tr>
<td>5歳児</td>
<td>37 (94.9)</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>196 (76.0)</td>
</tr>
</tbody>
</table>

※（ ）内の数字が％。

表3 年齢と“振り向き”的要因

<table>
<thead>
<tr>
<th>年齢</th>
<th>i.保育者の音声</th>
<th>ii.幼児の音声</th>
<th>iii.音</th>
<th>iv.身体接触</th>
<th>v.その他</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>3歳児</td>
<td>27 (17.8)</td>
<td>28 (18.4)</td>
<td>24 (15.8)</td>
<td>21 (13.8)</td>
<td>31 (20.4)</td>
</tr>
<tr>
<td>4歳児</td>
<td>12 (17.9)</td>
<td>5 (7.5)</td>
<td>15 (22.4)</td>
<td>14 (20.9)</td>
<td>8 (11.9)</td>
</tr>
<tr>
<td>5歳児</td>
<td>3 (7.7)</td>
<td>2 (5.1)</td>
<td>11 (28.2)</td>
<td>6 (15.4)</td>
<td>2 (5.1)</td>
</tr>
<tr>
<td>上記</td>
<td>42 (16.3)</td>
<td>35 (13.6)</td>
<td>50 (19.4)</td>
<td>41 (15.9)</td>
<td>41 (15.9)</td>
</tr>
</tbody>
</table>

※（ ）内の数字が％。

(172) 66
進びにおける幼児の“振り向き”の意味

4歳児では、保育者の間接的な音声に対する反応が薄くなり、幼児の音声に対する反応が增大し4割を超えた。4歳児になると互いに名前を呼び合い保育者同士の直接的な音声が多くなっていることは、4歳児後期になると「いれて」「いいよ」という定型的な仲間入りルールによる明示的な仲間入りが多くなることを示した先行研究の成果とも一致する。

3歳児については、ⅰからⅲにわたって回数・比率が安定して多い。このことから、3歳児がまわりの友達や保育者の言動すべてに対し、常に感情を研ぎ澄ませて状況の変化を読み取り、取ろうとしていることが理解できる。次回の観察動機は、周りの状況の変化を読み取ろうと敏かになっている3歳児の感情が理解できる事例である。

事例：声や音が聴こえないときの“振り向き”
Y子がしゃがんで砂場でケーキづくりをしてる。バケツに砂を押し詰めて、ひっくり返して、きれいに型を抜こうと繰り返す。そのとき、不意に背後にはいた保育者が砂場に入っていた子どもをつれて、園舎の奥の方へ歩き始める。園舎の影に入ると、それまで大きく響いていた他の幼児の声が突然聞こえなくなり、歩く音も小さくなる。保育者が歩き始めても、“振り向き”をしなかったY子が、園舎の影に入って音や声が聞こえなくなったとたんに、保育者が行った方向に“振り向き”を行った。しかし、座ったままで保育者や他の保育者が園舎の影に隠れて見えない。C子は立ち上がって歩き、園舎の裏側に保育者がいるのを確認すると、またものとの場にしゃがみこんでケーキづくりを始めた。

この事例が特徴的なのは、他の事例では幼児が声や音に気づいて“振り向き”を行っているのに対して、これまであった声や音が急になくなったことに気づいて“振り向き”を行った点にある。この事例から、幼児の“振り向き”がただ単に声や音に刺激を受けて表れる受動的な感情を表象した行為ではなく、視覚や聴覚などの感官を用いて自分の周りの状況の変化を自ら捉えようとする能動的な感情を表象した行為であることが理解できる。

（2）“振り向き”から相互作用への展開過程
“振り向き”要因による事例収集の理由
つぎに、【研究2】では、【研究1】の結果を踏まえて、進びの中で“振り向き”から相互作用へと展開していく過程を明らかにすることで、幼児の“振り向き”の意味について分析、論証を行う。そのため、表3に示したように、すでに“振り向き”の後に相互作用することを前提として行う受動的な“振り向き”、例えばY児がX児といっしょに遊ぼるとときに、「Xちゃん」と声かけしたり、X児の肩を叩いたりする要因（i，ii a. 直接的）な音声、「iv a. 意図的」な身体接触を要因とする“振り向き”は研究対象から外す。そして、表3において「iii音」，「i，ii b. 間接的」な音声、「iii音」，「iv b. 偶発的な身体接触」の要因に分類し、遊びの中でふいに現れる状況の変化を幼児が能動的に読み取ろうとする“振り向き”を研究対象と選定することとした。

表3から、先に示した「i，ii b. 間接的」な音声，「iii音」，「iv b. 偶発的な身体接触」の要因による“振り向き”は3歳児が最多多く観察されている。そして、表1，表2，3歳児が砂場で、1人もしくは2人で遊んでいるとき、多くの“振り向き”が現れることが明らかである。そこで【研究2】では、3歳児が1人，もしくは2人で砂遊びをする場面に焦点を当て、どのようにして“振り向き”が現れ，それから相互作用へと展開する具体的な事例を収集し，分析と論証を行う。

相互作用への展開過程の結果と考察
表4は【研究2】において収集された事例12件を3つの場面に分けて概要を示したものである。以下具体的な事例をもとに，“振り向き”から相互作用への展開過程の特徴について述べる。

(ア)“振り向き”直後の注視
“振り向き”直後に，その要因を生み出した幼児に対して注視を行う姿が8事例で見られた。
以下，その事例と考察である。
<table>
<thead>
<tr>
<th>No.</th>
<th>表紙の音</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>聴音</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>聴音</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>聴音</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>聴音</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>聴音</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>聴音</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>聴音</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>聴音</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>聴音</td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>聴音</td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td>聴音</td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>聴音</td>
</tr>
</tbody>
</table>

表4 3歳児の砂遊びにおけるエピソード事例の概要

<table>
<thead>
<tr>
<th>No.</th>
<th>表紙の音</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>聴音</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>聴音</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>聴音</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>聴音</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>聴音</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>聴音</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>聴音</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>聴音</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>聴音</td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>聴音</td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td>聴音</td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>聴音</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（174）}

NII-Electronic Library Service
遊びにおける幼児の「振り向き」の意味

事例1： 白い雪山をつくるA子とB男

登園するとすぐに砂場に向かって走っていくA子、砂場の脇に置かれた砂遊びの道具が入った箱からシェルを取って砂場の中央に座る。砂場の中には、昨日の砂遊びで年長さんが掘った穴がちょっと崩れた状態で存在する。そこでA子がすぐにシェルを持って砂場中央に座る。「じゅうにこのようにして砂を取って山を高くする」と順次、A子はその様子には目もくれず、穴を掘り進めていく。すると穴が深くなると同時にA子の右脇に砂の山ができる。するとA子はその場でできた砂の山に視線を移し、穴掘りを止めて、その山の斜面をシェルの背中でポンポンと叩き、山を固めようとする。そして、その上での山を高くしようと、穴の側面を削った土を山の頂日にかけて、その山頂をシェルの背でたく。それを何度か繰り返す。

A子がその繰り返し始めることを、登場にやってきたB男が、A子の背後にやってきた。そこでシェルで砂を削って砂の上の山を作り始められる。A子と同じようにそれに繰り返すことで山を高く始めめる。しかし、しばらくするとB男は砂遊びの道具の箱のそばに歩み寄る。そして、そ の道具箱の中からプリンカップを持って、砂場から少し外れたグラウンドよりの土が乾き、固定した地表部分を、シェルを横向きにそして薄く削るようにして集めてプリンカップに盛り始めめる。

ふいに、A子がB男のシェルで地表の土を切る音に気づき、その場に居る頭部だけで「振り向き」、B男の姿を確認する。すると今度は上半身をB男の方に向けてしばらくじっとその様子を見る。そして、立ち上がり砂遊びの道具箱に行く。その箱の中からプリンカップを持って、B男の側に座ってB男と同じようにシェルを横に持って地表の土を削り返し始めめる。

B男がA子と視線を合わせて笑顔をみせるが、忙しくまた土を削り始めする。削りつつ乾燥した部分がなくなると、ちょっと横にずれる。それを繰り返し、削りつつ二人。B男のプリンカップが満杯になると、B男はあっさりと削った土をシェルで集めて、A子のプリンカップに入れる。A子は「ありがとう」と言っているとすぐに削り始め。B男がふいに立ち上がり、自分の作った砂の山の頂面にその乾いた砂をふりかける、シェルの背で叩き始めめる。

しばらくすると、A子も自分作の作った山に乾いた砂をかける。A子は、その山を指で示して、B男の方に向かって「雪が降ったんだよ」と言う。B男はA子の白くなった山を見て、「僕のは※※山なんだ」と言うとA子はB男のそばにやってきた。A子がB男の山を白くなった部分をシェルの背で叩く。B男は、ささき土を削った場所にとって土を削り始め、山を集めるとまたそれを山にかける。そして、A子がシェルでその山をかけたところをシェルでたく。

「振り向き」直後の注視による承認

事例1では、1に示したようにA子は、B男がたてたシェルを使って乾いた地表を削り取る音を要因として「振り向き」を行っている。A子は初め頭部だけで「振り向き」、B男の様子を確認する。その後、つづいてA子は頭部だけでなくさらに上半身もB男の方に向けてその要因となった音を出すB男の姿を注視している。このように要因となる音声や音、身体接触が起きた方向に「振り向き」、その要因を生み出した主体者である幼児に対して一定の時間注視する行為は8つの事例で認められている。

野村21によれば、誰かを注視する行為とは「他者から触れることが『物理的繋りかみ』の侵犯を構成するのと同種の現象」であり、見つめる対象に対する刺激や作用である。そして、見つめられる者は「誰かにじっと見つめられていていることがわかると思わず見返すという現象が広く見られる」ことを示し、「見つめる者のが見返す視線は、警戒、不審、警告の身体反応である」と述べている。すなわち、見つめられた者が見つめる者に対して消极的、否定的な意思を持つときには、人はその人を見返すなどななる反応を示すことを示唆しているのである。しかしながら、B男はなんの反応も見せていない。A子はB男の視線の範囲におり、距離も2m程度で、B男はA子の後に砂場へと来ており、さらにA子は頭部だけでなく、上半身をB男に向けて一定の時間注視していることからも、A子が自分（B男）を見ていることを
B 男は十分に認識していると考えられる。もし、B 男が A 子に対して、自分を見て欲しくないと感じているならば、A 子を見返したり、その意態を言葉にしたり、A 子に向かって背を向けたりと何らかの反応を示すはずである。B 男があえて反応を示さないということは、自分が A 子を認めており、この注視の後に自分に対して何らかの関わりを行っていくことを暗黙的に承認していると考えられる。さらに、B 男が A 子の関わりをこの時点で承認していることは、③のように A 子が B 男の傍に来て、動作を模倣したときに見せた B 男の好意的な表情からも理解できる。つまり、幼児が「振り向き」の直後に行う注視によって、見つめる幼児と見つめられる幼児との間に、その後の関わりに対して既に暗黙的な承認を成立させると考えられるのである。

（イ）双方向的な“振り向き”と場の共有
これまで“振り向き”の直後、注視を行った事例について考察してきた。次に、注視が行われず交渉へと展開した4事例について、その代表的な事例を通して考察を行う。

事例 5：車で競争する C 男と D 男
C 男が1人で砂場にできた山の斜面をソフトビニールの車を「ウィーン」と声を出したがら走らせている。山の周りを何周かする后、山の頂上に向かって車を上げ、頂上に差し掛かると「ジャンプ」という形で車を手から離し、まるで車が山からのジャンプをするような動きを何度も繰り返している。

しばらくすると、①C 男の背後からの音を少し驚いたところにいた D 男が振り向き、C 男の様子を見る。そしてすぐに立ち上がり、そばに落ちていた車を持って来る。そして、その車を昨日年長さんが車で走らせたときに水を塗込んだあとでできた流れに沿って車を走らせ、「ウィーン」と声を出す。

⑥その声に気づいた C 男が、D 男の方を振り向くが、少し視線を送ってただで、また山の周りを車をくるると回転させて、山頂でジャンプすることを繰り返す。それから、C 男が3回目のジャンプをしたときの「ジャンプ」と頼りに反応して、⑦今度は D 男が C 男の方を振り向き、二度だけ視線を送るにすぐに自分の車を溝に入れて「ウィーン」と言って走らせ始める。

D 男は溝に沿いつつ、さらに溝を深くしながら車を走らせている。次第に、C 男の山に近づいていく D 男。①D 男が近づいてくるので D 男の声や車の音を切って点で感じた C 男がきたまた D 男の残り振り向きが、視線を送るだけで、また自分の車に視線を戻し、山の周りで車を走らせよう体を移動させようとすると、②後で溝を掘りながら進んできた D 男の腕と、C 男の背中がぶつかり、C 男が D 男の方を振り向き、D 男の姿を見る。すると C 男は D 男の車の後ろで自分の車を置いて D 男の車が進んでいる方向に一緒に車を走らせ、③「よーいこんしぃ」と言う。そして、自分が作った山を周囲するコースを、D 男を先導するように車を走らせる。D 男も C 男の後に走らながら車を動かしている。3 回山頂をジャンプした後、D 男は山の周囲コースから外れて、自分が作った溝のコースに車を走らせ、C 男はその後にくっついて溝のコースで車を走らせながら、D 男と同じように溝をさらに深く削るように走らせていく。

“振り向き”による場の共有と承認
交渉を行う事例では、④～⑧で示したように、C 男と D 男は交互に“振り向き”を行う特徴が見られた。この適応に現れる“振り向き”は、その時間的な差か、C 男の“振り向き”に対して D 男が見返すといったような、見つめられた者が思わず相手を見返すという性質のものではない。また、C 男と D 男は互いに背を向け合っており、互いが“振り向き”を行っていることは視覚的に確認することが出来ないこと。二人が砂場の対角線上に位置距離が遠いというからの物理的な条件を考慮すると、⑤の C 男が D 男に対して行った“振り向き”は D 男は気づいていない。⑦の前段階の段階になって、D 男が次第に C 男の方へ接近をはじめたことで、D 男の身体が C 男の方を向いたために、⑤の“振り向き”の段階でやっと C 男が自分（D 男）の向きに“振り向き”を行っていることを認識したと
考えられる。伸展挿入を促すような明示的な発話もないにもかかわらず、⑧の身体接触による“振り向き”の直後に、すぐに二人は車で競争するというイメージを共有し、互いに関わりながら遊び始める。この事実は、⑧以前において、C男とD男との間に⑧の“振り向き”後の相互作用について何らかの形で承認が行われたことを示す。

砂上20)は、幼児が身体を近接させ、一緒に遊ぶことを「場を共有する」と言う言葉で捉えて、「場を共有する」ということは、仲間意識や遊びのイメージという目に見えないものを、身体の具体的な動きという目に見えるものとして共有すること」と述べ、身体的な近接が仲間意識や遊びのイメージの共有化の度合いを表象していることを示唆している。この先行研究の成果を踏まえると、C男が先端をコースの外に走らせ遊びのイメージを、D男が“振り向き”見て真似して、さらに、同じように遊ぶD男をC男が“振り向き”見ることを繰り返すことで、C男とD男の間に仲間意識や遊びのイメージの共有が生み出された。そして、この生み出された仲間意識や遊びのイメージの共有が目に見えるものとして、C男にD男が身体を近接するという形で顕在化し、「場を共有する」という現象が生じたと捉えることができる。すなわち、幼児が行う双方向的な“振り向き”によって、仲間意識や遊びのイメージの共有が促されて、「場を共有する」現象を生み、先に述べた注視と同じように、その後の関わりについて暗黙的な承認を生み出したと考えられるのである。

また、3歳児の砂場付近で相互作用に至らなかった事例について【研究1】で撮影したビデオデータをもとに再度確認を行った。その結果、“振り向き”直後の幼児の遊びの様子が映像で確認できた事例を選定し、相手に関わろうとして近接・交渉を行おうながらも相手から拒否されたり、反応が無かったりと相互作用に至らなかった事例を8件選定した。その8事例では、幼児は“振り向き”直後に注視や、双方向的な“振り向き”を行っていなかった。以上からも、“振り向き”後の注視や双方向的な“振り向き”が、幼児同士のその後の関わりについての暗黙的な承認を生み出す機能を持つことが逆説的に示唆される。

（ウ）接近から相互作用までの過程

次に、注視と接近後から相互作用に至るまでの経過について検討を行う。事例1では、A子はB男と同じ道具をそろえ、接近して傍に人がB男と同じようにシャベルを持ち、表面の乾いた部分だけを削るようにして砂を集め始める。事例2においても、ここではA子に、D男が“よいとどうしよう”と言う暗黙的な方略による交渉を行っている。その直後にD男がC男の車の後ろにある自分の車を置いて、C男の車を追い回すようにして、その動きを模倣している。このように接近・交渉の後に、その“振り向き”的要因を生みだした主体者の行為を模倣する様子は全12事例で見られた。そして、このような模倣する活動がしばらく展開したのち、発話による働き掛けが多く行われ始め、相互作用が活性化し、イメージを出し合いながら共通して遊ぶ姿が見られた。

この相互作用へのきっかけの方略として全12件の事例のうち、注視が確認できた8事例においてはすべてが模倣的な方略によるもので、双方向的な“振り向き”の4事例ではすべて暗黙的な方略による交渉が行われた。明示的な方略が用いられることは無かった。この事実は、3歳児の相互作用のきっかけが暗黙的な方略、模倣的方略が多いことを示した先行研究9)や、3歳児の砂遊びにおいて暗黙的な働きかけが多いことを示した先行研究10)の成果と合致する。

4. 結 論

以上から、“振り向き”から相互作用へと展開する過程について図1にまとめ、以下、結論としてまとめた。

考察から、遊びの中で現れる幼児の“振り向き”は、ただ単にものずるらしい音声や声への
反応として行われるのではなく、幼児が伸と
同じ動きや場を共有することで仲間と共同して
遊びたいという能動的な心理による欲求を表象
した現象として捉えることができる。幼児は、
この仲間との相互作用への欲求を“振向”
という行為を通じて発現し、その直後の注視や
再度の“振向”によって、注視や“振向”の対象となる幼児や保育者と異なるか
を確認する。そして、その欲求を否定的に受
け止めた幼児や保育者は、その注視に反応しなかったり、逆にその幼児に対して“振向”
を行ったりすることで、その後に活動を再構的
に行うことについて暗黙的に承認を行う。逆に
否定的に受け止めた幼児は見返したりすること
で、かかわりを拒否する。すなわち、遊びの場
面で幼児が見せる“振向”のやりとりを把
握することは、その空間に共にいる幼児や保育
者との間にどのような仲間意識、イメージの共
有が保たれているのかを知るための目安のひと
つと考えられる。

ただし、この“振向”という行為は、日
常の中で意識的、意図的に行う行動ではなく、
どちらかというと無意識的、偶発的に表れる行為
である。そのため、保育実践において現れる幼
児の“振向”を正確に把握したり、促した
り、保育者が意図的に“振向”を行ったり
することを援助の方策の一つとして行うことは
難しい。しかし、実際には、保育者は日常で多
くの“振向”を生み出し、自らも“振向
き”を行っている。本研究でも表4の事例2で
示したように、保育者の「わーきれいね」と言
う音声が要因となって幼児が“振向”，そこか
から注視、模倣と展開し、複数の幼児が共同し
て色水遊びを楽しんだ実践が見られた。保育者
が自らの保育実践をビデオで撮影し、その動画
を元にカンファレンスや省察を行う際に、幼児
の“振向”に着目することで、その幼児の
仲間意識の高まりや関心の度合いなど、幼児の
心情への理解を深めることができ有効であると
考えられる。

注
注1) このHPP法は、4か月から12か月の乳
児を対象とし、母語や非母語の音韻比較や、
声のピッチによる選好の違いなどを明らかにし
た研究で用いられた。
Rachel, A. Hayes, Alan Slater, Elizabeth Brown
(2000) Infants'ability to categorise on the basis of
rhyme. Cognitive development, Volume 15, Issue
4, October-December 2000, 405-419.

引用文献
(1)森 司朗 (1999) 幼児の「からだ」の共感に
関して—対人関係の自己の観点から—. 保育
学研究 第37巻第2号. 24-30
(2)塚崎京子・無藤 隆 (2004) 保育現場におけ
る3歳児の身体接触の変容. 乳幼児教育学研
究 第13号. 13-25
(3)榎沢良彦 (1997) 関生活における身体の在り
方—主体的身体の視座からの子どもと保育者

図1 3歳児の“振向”から相互作用までの展開過程
の行動の考察. 保育学研究35巻第2号. 38-45
(6)松井愛奈・無藤 隆・門山 睦 (2001) 幼児の仲間との相互作用のきっかけ：幼稚園における自由遊び場面の検討. 発達心理学研究第12巻第3号. 195-205
(7)野村雅一 (1985) 日常動作の構造とコミュニケーション. 文化人類学第1巻第1号. アカデミア出版会. 23-32
(8)砂上史子・無藤 隆 (2002) 幼児の遊びにおける場の共有と身体の動き. 保育学研究第40巻第1号. 64-74
(9)前掲(6)
(10)松井愛奈 (2001) 幼児の働きかけと遊び場面との関連. 教育心理学研究 第49巻第3号. 285-294

謝辞
本研究の実施にあたり、ご協力いただきました保育園の子どもたち、先生方に感謝申し上げます。

付記
本稿はその一部を日本保育学会第63回大会 (2010年) において発表した。